

平成14年度 狹山藩陣屋跡 発掘調査報告書 I



平成14年(2002年)11月

大阪狭山市教育委員会

平成14年度 狹山藩陣屋跡
発掘調査報告書 I

平成14年(2002年)11月

大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市内には大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、数多くの文化財があります。大阪狭山市教育委員会では、このような文化財の保護をはかるため、市内の発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は、南海電気鉄道株式会社により施工される、さやま遊園跡地の宅地開発に伴いまして、狭山藩陣屋跡の発掘調査を実施しました。本発掘調査報告書はその成果をまとめたものです。

調査の結果、近世の狭山藩陣屋跡下屋敷における造成工事の跡や、それ以前の自然地形と、古墳時代中期以前における人々の生活の痕跡が断片的ではありますが、確認されております。本書がわずかでも各分野における研究の一助となれば、まさに望外の喜びです。なお、今回の調査におきましては調査地周辺の皆様方、ならびに開発者の南海電気鉄道株式会社には多くのご協力とご配慮を賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも本市文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願ひ申し上げます。

平成14年11月

大阪狭山市教育委員会

教育長 澤 田 宗 和

例　　言

1. 本書は大阪狭山市教育委員会が南海電気鉄道株式会社と発掘調査に関する契約を締結し、実施した、さやま遊園跡地宅地開発工事に伴う発掘調査の成果をまとめた報告書である。
2. 収録した調査は以下の通りである。
狹山藩陣屋跡 02-01区
3. 発掘調査は平成14年4月から同年5月まで実施し、整理作業は平成14年4月から同年10月まで実施した。
4. 発掘調査は大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課の植田隆司が担当した。遺物の整理作業には笹岡裕里子・橋本和美・若宮美佐の参加を得た。報告書の執筆・編集は植田が担当した。また、遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房の阿南辰秀氏・伊藤慎司氏に依頼した。

本　文　目　次

(頁)

序 文　　大阪狭山市教育委員会教育長　澤田宗和

例　　言

第1章 位置と環境

　　第1節 地理的環境 1

　　第2節 歴史的環境 2

第2章 調査にいたる経過 8

第3章 遺構

　　第1節 上層遺構と層序 10

　　第2節 下層遺構 15

第4章 遺物

　　第1節 上層遺構出土遺物 17

　　第2節 下層遺構出土遺物 17

第5章 まとめ 21

報告書抄録 23

挿 図 目 次

	(頁)
図1 大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類	6
図2 狹山藩陣屋跡における既存の調査箇所	7
図3 調査区位置図	8
図4 さやま遊園平面図	9
図5 素掘り溝平面図	11
図6 上層遺構と近世整地層	12
図7 土層断面図（1）	13
図8 土層断面図（2）	14
図9 下層遺構と谷地形	16
図10 上層遺構等出土遺物	18
図11 下層遺構・谷底埋土出土遺物	19

表 目 次

	(頁)
表1 上層遺構等出土遺物観察表	18
表2 下層遺構出土遺物観察表	20

図 版 目 次

図版1 上層遺構
図版2 下層遺構と谷地形
図版3 出土遺物（1）
図版4 出土遺物（2）
図版5 出土遺物（3）

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

泉北丘陵と羽曳野丘陵に挟まれた地に位置する大阪狭山市は、旧天野川の氾濫原である狭山池主谷がその市域を南北に貫いている。狭山池主谷の東西には中位段丘が、さらにその外側には高位段丘と丘陵が南北に連なるため、宅地化が進む以前は、山に挟まれた地形を示す地名「狭山」にふさわしい景観が広がっていたであろう。この狭山池主谷には多くの支谷が合流しており、その支谷のひとつに流れる三屋川は、かつては狭山池主谷を北上する旧天野川(西除川)に合流していたが、現在ではその合流点は狭山池の中に位置する。旧天野川と三屋川の水は狭山池の西除の洪水吐と東除の洪水吐から流れ出し、西除川と東除川になって中位段丘上を北上している。これは、狭山池築造以後、人工的にその流路を固定したことによるものであり、狭山池築造以前は旧天野川が主谷の沖積低地をそのまま北上していた。

狭山池主谷に合流する細かな支谷の多くは、周辺の開発が進んだために現況では目視確認できるものが少ない。今回、発掘調査をおこなった狭山池東岸にも、狭山池主谷へ合流する細かな谷筋がいくつも存在していたようである。大正・昭和の改修以前の狭山池岸部の地形を記録している「狭山池法下耕地整理地区及ビニ隣接スル土地現形并予定図」を参照すると、狭山池東岸部の大正時代の地形をある程度確認することができる。とくに東岸部の北半分については、粗い等高線が記されており、狭山池へと下る細かな谷筋が少なくとも2箇所は大正時代まで存在していたことがわかる。この図に記されている2箇所の谷筋のうち東除のすぐ南側にある谷筋は、以前はさやま遊園の屋内スケート場が建っていた場所の北側にあたり、1992年に実施した狭山池3号窯(S13号窯)灰原の発掘調査時には、この谷地形の池側の端部を確認している¹⁾。また、図に記されている2箇所の谷筋のうち南側の谷筋は、南東から狭山遊園跡地を北西へとのびる谷筋である。今次の調査区はこの谷筋の上流部付近に位置しており、発掘調査による原地形の復原が期待された。

註記

1)『狭山池』埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査III狭山池3号窯」狭山池調査事務所、1998年

第2節 歴史的環境

大阪狭山市域における旧石器時代の資料として、寺ヶ池遺跡で採集された晩期旧石器時代の有舌尖頭器が知られている。また、東野遺跡・池之原地区・ひつ池の各所にて採集されたナイフ型石器もこの時代の遺物となりうる可能性がある¹⁾。縄文時代の資料としては、寺ヶ池遺跡・東村遺跡・大鳥池遺跡・へど池・狭山池・ひつ池・上明池・池之原地区で採集された石鏃・スクレイバーなどが知られており²⁾、当該調査区周辺域が縄文人の狩猟場であったことを伺わせる。付近の縄文時代の集落遺跡としては富田林市に所在する錦織遺跡が著名であるが、旧天野川流域ではこの時期の集落遺跡はいまだ確認されていない。弥生時代後期になると旧天野川流域でも集落遺跡がみられるようになる。狭山池の南方約3kmの地点にある茱萸木遺跡は弥生時代後期の高地性集落である³⁾。

古墳時代以降の本市域内における人々の活動の痕跡は、近年の発掘調査成果によって、明確に認識可能なものとなっている。旧天野川流域の沖積低地に立地する池尻遺跡では、溝・土坑・焼土坑など住居跡となる可能性がある遺構とともに庄内式の壺・壺と布留式の壺が出土しており、古墳時代前期までには旧天野川流域に集落が成立していたことを示している⁴⁾。旧天野川右岸の中位段丘上に立地する今次発掘調査地では、自然の谷地形の底部分からTK47型式の須恵器が出土しており、古墳時代中期の集落が中位段丘上に存在した可能性が高い。

古墳時代中期以後、泉北丘陵を中心とした地域で須恵器生産が盛んに行われ、陶邑窯跡群が形成された。5世紀後葉から6世紀前葉までの本市域内における窯の造営は、陶器山丘陵およびその北方に連続する高位段丘のみに限定されるようである。発掘調査が行われた窯跡としては、TK47型式～MT15型式の須恵器を生産した陶器山252号窯(MT252・山本1号窯)⁵⁾がある。また、その南南東約800mの地点には陶器山15号窯(MT15)⁶⁾がある。増大した須恵器の需要に対応して、6世紀後半の陶邑窯跡群における生産活動はより活発なものとなる。窯体の構築場所と燃料の薪をあらたに確保するため、窯の造営は東方の中位段丘へとその分布域を拡大する。TK43型式～TK209型式の須恵器を产出するこうした中位段丘斜面に築かれた窯跡には、太満池北窯(TM N)⁷⁾・太満池南窯(TMS)⁸⁾・狭山池2号窯(S I 2)⁹⁾・狭山池3号窯(S I 3)¹⁰⁾・池尻新池南窯(ISS)¹¹⁾・今熊1号窯(IK1)¹²⁾・ひつ池東窯(HT E)がある。窯の造営域が最も東方へと拡大した当該期以降の窯の造営は東除川水系の中位段丘崖より以西で行われており、この谷筋が陶邑窯跡群の東端となっている。7世紀に入ると本市域内における須恵器窯の数は減少するが、狭山池主谷周辺の中位段丘斜面での操業は継続し、東池尻1号窯(HI 1)¹³⁾・狭山池4号窯(S I 4)¹⁴⁾・ひつ池西窯(HTW)¹⁵⁾などが確認されている。

7世紀前葉、狭山池主谷を横断する全長約300m・全高約6mの堤を築くことによって旧天野川(西除川)と三屋川の流れを堰き止め、ダム式のため池である狭山池が造られた。この狭山池を堰き止める堤の直下から、コウヤマキを割り抜いてつくられた樋管を連結する下層東樋が検出された。この全長約60mにも達する底樋の埋設時期は、樋管材であるコウヤマキの伐採年代が西暦616年であることが年輪年代測定法により判明したため、同年以降の非常に限定され

た時間幅の中に求められることとなった¹⁶⁾。狹山池築造以後、その灌漑範囲に位置する下流地域では、美原町平尾遺跡・太井遺跡・丹上遺跡、羽曳野市郡戸遺跡・河原城遺跡など、土地開発の拠点となる遺跡が成立していった。大阪狹山市域では7世紀後葉から8世紀初頭頃、旧天野川右岸の中位段丘上に東野庵寺が建立された。

奈良時代、天平3(731)年に行基が狹山池院と尼院を建てたと『行基年譜』に記されている。これに関連する建物跡は現在までに確認されていない。が、おそらくは狹山池北東の中位段丘上、もしくは北西の中位段丘上に古地していたのではないかと想定される。なお、狹山池北堤には行基が改修したと考えられる厚さ60cmの盛土が確認されている¹⁷⁾。また、天平宝字6(762)年、狹山池の大規模な改修工事が実施されたことが『続日本紀』に記されている。発掘調査では、狹山池北堤を築造当初と比較して2倍に拡幅する大規模な盛土工事が実施されたことが判明した。また、飛鳥時代に埋設された下層東柵を池側へ約13m延長する工事もこの時に行われたようである¹⁸⁾。

平安時代、最澄が写した弘仁10(819)年の記録によれば、僧勤操が「狹山池所」にいたことがわかる。狹山池改修に関わる役所が、狹山池の近傍に設置されていたものと思われる。なお、狹山池下層東柵では、奈良時代にあらためて造られた取水部から、年輪年代測定法によって弘仁8(817)年に伐採された部材が確認されており、勤操による弘仁の改修時に、下層東柵取水部の補修が行われたと考えられている¹⁹⁾。また、このデータによって、飛鳥時代に埋設された下層東柵が、補修を受けながらも200年間以上も機能し続けたことが明らかになった。

鎌倉時代、重源によって狹山池の改修が行われた。発掘調査で出土した江戸時代の中柵に使用されていた石材の中から重源狹山池改修碑が出土し、この碑文から、重源の改修が建仁2(1202)年に行われたことが確認された²⁰⁾。同時に出土した石材は、古墳時代の家形石棺や横口式石棺の材を転用したもので、重源の改修時には石柵として利用していたものと推定される²¹⁾。13世紀前半、狹山池北堤から約400m北方の地では、池尻遺跡が営まれており、水田跡や屋敷地などの遺構が検出されている。また、池尻遺跡の13世紀前半の遺構面は、複数回にわたると考えられる洪水によって堆積した砂層が確認されており、この時期に狹山池北堤は一度決壊したものと考えられる。南北朝の動乱期、狹山池北西に築かれた池尻城の周辺では、延元3(1338)年と正平2(1347)年に合戦が行われた。池尻城跡からは13世紀末から15世紀前半にかけての建物跡が確認されている²²⁾。室町時代、天文年間から永禄2年頃(1532年~1559年)、安見美作守によって狹山池の改修が行われたが失敗した旨が、慶長13(1608)年に刻まれた西柵銘板に記されているが²³⁾、考古学的にはこれを裏付ける有効な資料がいまだ確認されていない。

文禄5(1596)年に発生した大地震によって狹山池北堤は大きな被害を受けたようで、その時の決壊痕跡が北堤断面調査²⁴⁾等によって確認されている。慶長13(1608)年、豊臣秀頼の家臣片桐且元によって、狹山池では慶長の改修が行われた。この時の改修は、西柵・中柵・東柵をあらたに造り、西除の造り替え・東除の新設、北堤のかさ上げを行う大規模なものであったことが発掘調査によって確認された。この時につくられた西柵・中柵は、江戸時代・明治時代・大正時代と補修を施しながら継続して使用され続けた。元和2(1616)年、北条氏信が狹山池の北東に陣屋を構え、狹山藩が開かれる。氏信は、小田原の北条氏康の子、氏規の孫にあたる。

寛永14(1637)年、北条氏宗の代に狹山藩陣屋の上屋敷が造営される。宝永6(1709)年、北条氏朝の代になって、現在の狹山遊園跡地を中心とした地域に、狹山藩陣屋の下屋敷が造営される。以後、明治維新に至るまでの間、狹山藩の陣屋は一貫してこの地に営まれていた。上屋敷における発掘調査では、天明2(1782)年の大火災で形成された焼土層や灰層を境にして、大火以前の下層遺構面と、大火以後から幕末頃までの上層遺構面が確認されている。下屋敷においては、発掘調査件数が少ないが、狹山遊園跡地北側の住宅地で、当時の武家屋敷の遺構が確認される。狹山遊園跡地の南半部は、幕末以後に作成されたと推定される「狹山藩陣屋下屋敷図」²⁵⁾によると、主として馬場や芝地や畠地として利用されていたようである。

狹山遊園は昭和13(1938)年5月に南海電鉄会社によって開園された。第2次世界大戦中・戦後は、狹山池も遊園地も荒廃していたようであるが、昭和27(1952)年に大阪競艇施設会社が土地・建物を借りて競艇を開催した。しかし、事業不振のため、昭和30(1955)年に競艇開催地は大阪市住吉区に移転した。昭和34(1959)年4月1日、南海観光開発会社が狹山遊園の経営を再開し、以後、南海電鉄株式会社が「さやま遊園」の経営を継続してきた。さやま遊園は幼児と家族を主な客層とする親しみやすい遊園地として大阪府民に広く利用されてきた。遊園地の中央にそびえ立つ観覧車も狹山池の風景に欠かせない存在として人々の目になじんでいたが、遊園地はその役割を終え、平成12(2000)年4月1日をもって閉園となった。今次の調査後、さやま遊園跡地の南半部は分譲宅地および共同住宅用地として利用される予定である。

註記

- 1) a) 上野正和「狹山の考古学研究と私」『さやま誌 大阪狹山市文化財紀要』創刊号、1992年
b. 藤部明生「狹山の石器」『大阪狹山市史要』1988年
c. 狹山町史編纂委員会『狹山町史』第2巻、史料編、1966年
- 2) 前出註1文献
- 3) 1960年代後半に、近畿大学医学部附属病院用地造成に伴って発掘調査が行われ、現地説明会も実施されたようであるが、詳細は不明である。
- 4) 『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章第5節 下流遺跡の調査I池尻遺跡(1)」狹山池調査事務所、1998年
- 5) 楓仁孝・市川秀之「山本1号窯発掘調査概要報告書」『大阪狹山市文化財報告書』1、1988年
- 6) 田辺昭三「陶邑古窯址群I」「平安学園考古学クラブ研究論集」10、1968年
- 7) 市川秀之・植田隆司「太満池南窯・北窯発掘調査報告書」『大阪狹山市文化財報告書』5、1991年
- 8) 前出註7文献
- 9) 『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査II 狹山池2号窯」狹山池調査事務所、1998年
- 10) 『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査III 狹山池3号窯」狹山池調査事務所、1998年
- 11) 市川秀之・植田隆司「池尻新池南窯発掘調査報告—陶邑窯跡群の調査—」『大阪狹山市文化財報告書』7、1992年
- 12) 植田隆司「陶邑窯跡群 今熊1号窯(I K 1号窯)発掘調査報告」「大阪狹山市内遺跡群発掘調査概要報告書4」「大阪狹山市文化財報告書」12、1994年

- 13)『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査V 東池尻1号窯」狹山池調査事務所、1998年
- 14)『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査IV 狹山池4号窯」狹山池調査事務所、1998年
- 15) 植田隆司「ひつ池西窯—陶邑窯跡群の調査ー」『大阪狹山市文化財報告書』10、1993年
- 16)『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第2節 棚の調査III 東柵下層遺構」狹山池調査事務所、1998年
- 17)『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第1節 北堤堤体の調査I北堤断面」狹山池調査事務所、1998年
- 18) 前出註16・17文献
- 19) a. 光谷拓実「狹山池出土木柵の年輪年代」「狹山池」埋蔵文化財編、第3章 第3節、狹山池調査事務所、1998年
b. 小山田宏一・中山潔・有井宏子・白江人智・植田隆司『大阪府立狹山池博物館常設展示案内』大阪府立狹山池博物館図録1、2001年
- 20)『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第2節 棚の調査I中柵遺構」狹山池調査事務所、1998年
- 21) 市川秀之「狹山池出土の柵の復元と系譜」「狹山池」埋蔵文化財編、第3章 第5節、狹山池調査事務所、1998年
- 22) 小林義孝「池尻城跡発掘調査概要」、大阪府教育委員会、1987年
- 23) 前出註19 b 文献
- 24) 前出註17文献
- 25) 都築忠夫氏所蔵。下記書籍等に収録。
『大阪狹山市史叢書 絵図に描かれた狹山池』大阪狹山市教育委員会、1992年

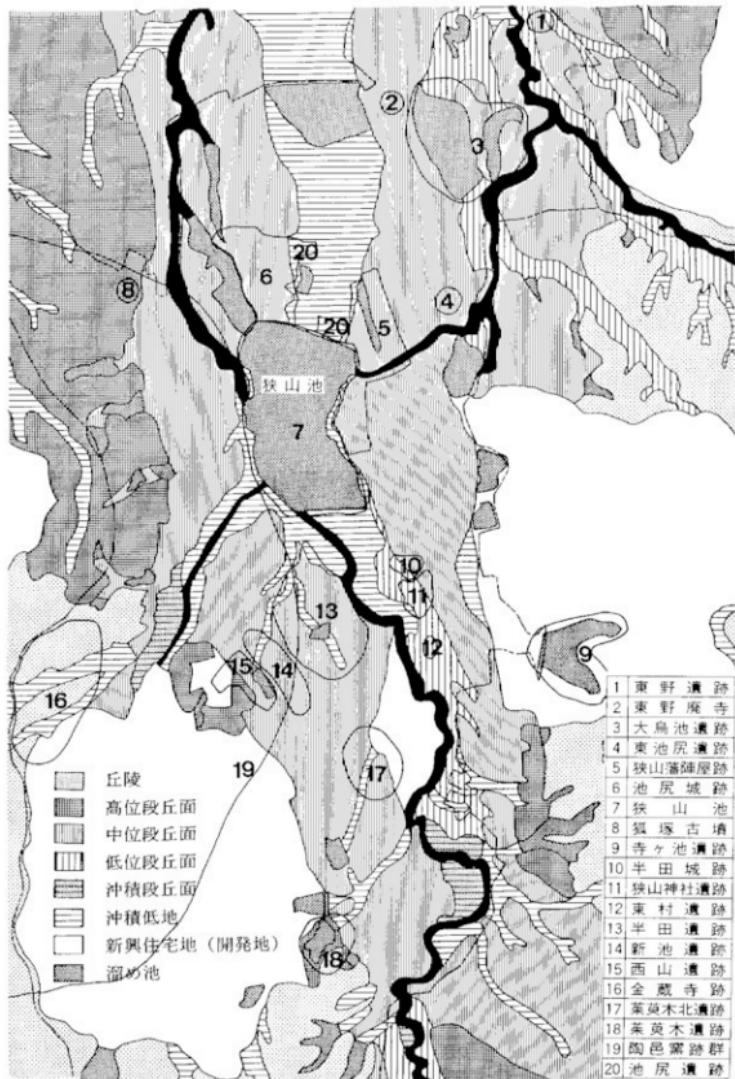


図1 大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類

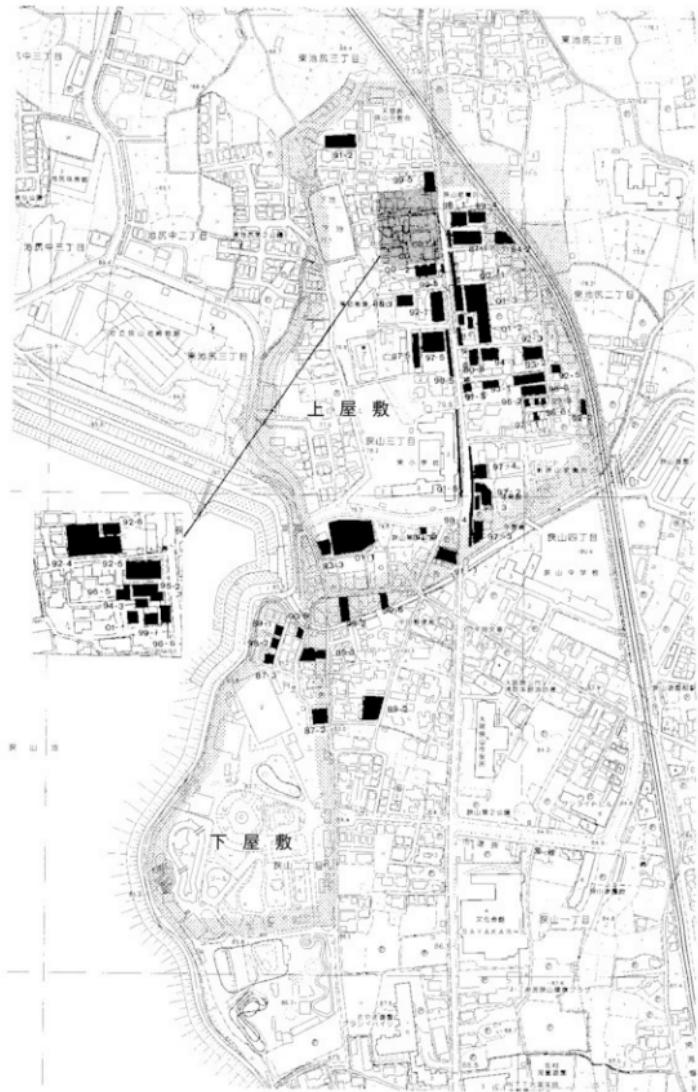


図2 狹山藩陣屋跡における既存の調査箇所（縮尺：1／5,000）

第2章 調査にいたる経過

本調査区が所在する狹山池東岸部分では、狹山池調査事務所による1990年～1991年の発掘調査で、6世紀後葉の建物跡や、7世紀前葉まで機能していた大溝跡がさやま遊園プールの南西側にて検出されている。また、プールの西側で、TK217型式の須恵器を包含する狹山池4号窯の灰原が確認され、同屋内スケートリンクの北西側で、TK43型式～TK209型式の須恵器を包含する狹山池3号窯および2号窯の灰原が確認されている。また、当該地には、江戸時代に狹山藩の下屋敷が置かれていたため、埋蔵文化財包蔵地図で「狹山藩陣屋跡」として周知されている。さやま遊園が平成12(2000)年4月に閉園し、この跡地の南半分の箇所を住宅地として再開発するため、南海電気鉄道株式会社から平成13(2001)年12月12日付で発掘届が提出された。1月22日から同月25日の間、開発予定面積41,833.23m²のうち、長さ19m～267mのトレンチを5箇所設定して事前発掘調査を実施し、土層断面観察を行った。結果、遺物の包含が認められた範囲、2,166m²を対象とした本発掘調査が必要と判断した。このため、本市と同社との間で土木工事に伴う発掘調査の契約を締結し、平成14(2002)年4月2日から同年5月31日までの期間で発掘調査を実施した。

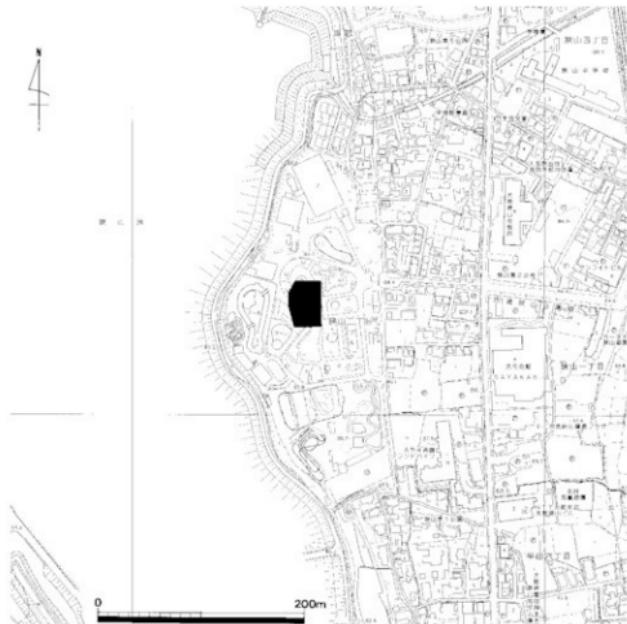


図3 調査区位置図（縮尺：1／5,000）

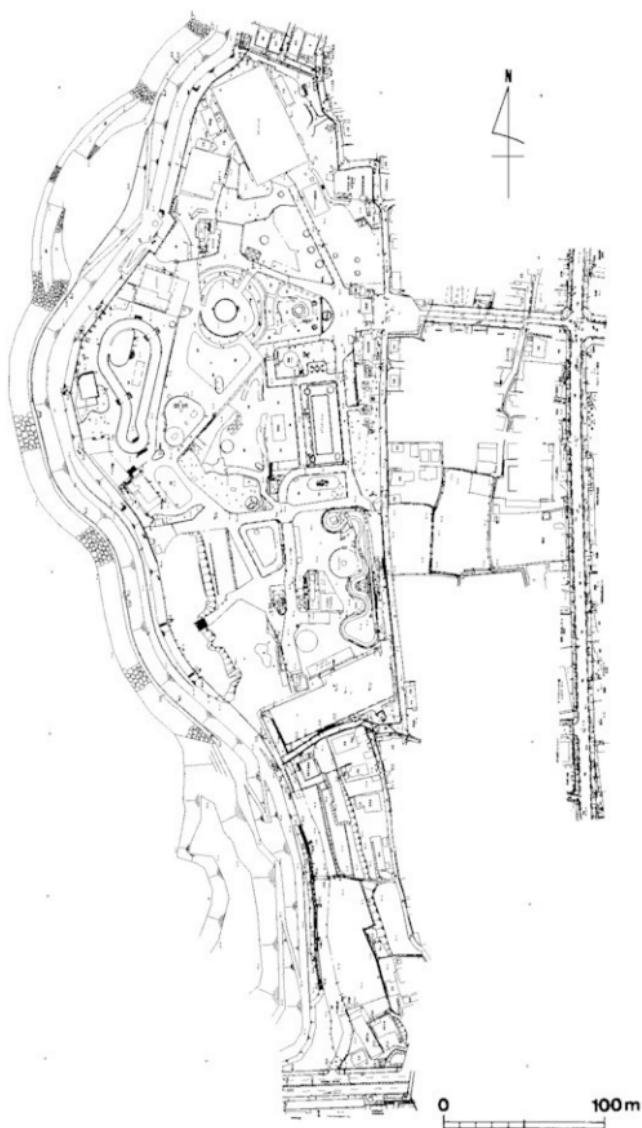


図4 さやま遊園平面図（縮尺：1/3,000）

第3章 遺構

第1節 上層遺構と層序

調査区付近の現地表面は標高85.00m前後であったが、この地表面より0.4m～2.0m下の標高83.00m付近までは、ガラが混じる現代の整地層であった。南北55m・東西40.2mの調査区のうち、北西隅の約380m²は遊園地施設基礎等による攪乱を受けており、2m近い近現代の整地層が続く。この近現代の整地層にはコンクリート塊やレンガ片等が含まれていた。その他の箇所については、0.4m～0.8mの深さまで掘削すると、上層遺構面を検出することができた。また、上層遺構面には東西あるいは北東—南西方向に走る攪乱箇所がみられたが、これは遊園地およびそれ以前の開発の際に設けられた暗渠である。

現地表面から約0.8mの深さで掘削すると、調査区の北東箇所および南西隅付近では灰黄色シルト層の地山面があらわれる。その地山露出箇所に挟まれた北西—南東方向に長い約800m²の範囲では、遺物をそのまま散布する整地層によってほぼ平坦に埋め立てられていた(図6)。整地層で埋め立てられた面は標高83.4m～83.9mを測り、上流側(南東側)が50cm高い。中央部と上流側では外側の地山面とは同じ高さまで盛土されており、全体に平坦であるが、北西方向へ緩く傾斜している。

また、調査区中央付近の整地層上面では、畑の耕作痕を確認した(図5)。この耕作痕は西北西—東南東へのびる14条の素掘溝からなり、その範囲は長さ約21m・幅約6mである。溝の中は明灰色の細砂が充填していた。素掘溝の現況での深さは約8cmを測る。

整地層の広がる範囲のうち、後世の攪乱による影響が比較的少ないと考えられる図6のA-A'断面の箇所で土層断面観察を行った(図7)。その結果、この整地層は北西—南東へのびる谷筋の谷底部分を埋め立てたもので、外側の地山面と同じ高さまで埋め立ててまでに、大別して3段階の盛土工事を行っていることが判明した。まず、谷底の一番深い部分2箇所に自然堆積した灰黄色砂質土・灰色砂礫土等の客土(土層番号19・23・24)の横および上面に、第1段階として黄灰色系のシルトと砂質土を10cm～25cmの厚さで盛り、谷底部分の凹凸を解消してできるだけ平坦な面をつくる。第2段階は暗灰色粘土と灰色・褐色のシルトで谷右岸の北東側から順に盛土していく、谷底中位まで全体に盛土を施す。第2段階の盛土の厚みは30cm～40cm程度である。第3段階の盛土は、谷両岸付近に灰黄色シルト・砂質土を盛り、最後に谷筋中央付近に灰褐色シルトを盛って平坦に仕上げている。第3段階の盛土の厚みは20cm～25cm。整地層全体の厚みは最大で75cmを測る。これら各段階の盛土は、各盛土間に旧表土層等がみられず、盛土の土質も似通ったものであるため、各段階の整地に時期差を考える必要はないであろう。盛土工事の工程として捉えるべきである。ところで、谷筋両岸の地山面は現況ではほぼ平坦な地形となっており、また、近世整地層直下の谷左岸側の地山の傾斜も緩やかなものであるが、谷底に堆積した客土付近土およびその外側付近の地山傾斜角度はそれらと異なるものである。おそらく、幅8m程度の谷底近辺を除く範囲においては、地山の切土工事が行われた

あとに、あらためて盛土工事が行われたものと推測される。つまり第1段階の盛土がみられる範囲より外側は、原地形が遺存していないものと思われる。

この整地が行われた時期を特定することは難しいが、整地層上面に散布する遺物から、江戸時代後期から末期以前に行われた造成工事の跡と考えられる。さらに、後述するように、この整地層の下層に位置する遺構面の土坑1では、その埋土内から18世紀頃の陶器中水注蓋が出土している。よって、この箇所における造成工事は、宝永6(1709)年に狭山藩陣屋跡下屋敷が設けられた時にはまだ施工されていない可能性が高く、天明2(1782)年の火災前後に削平・盛土を行って平坦に整地し、幕末に至るまでの間、馬場や芝地として利用されていたのではないかと推定できる。

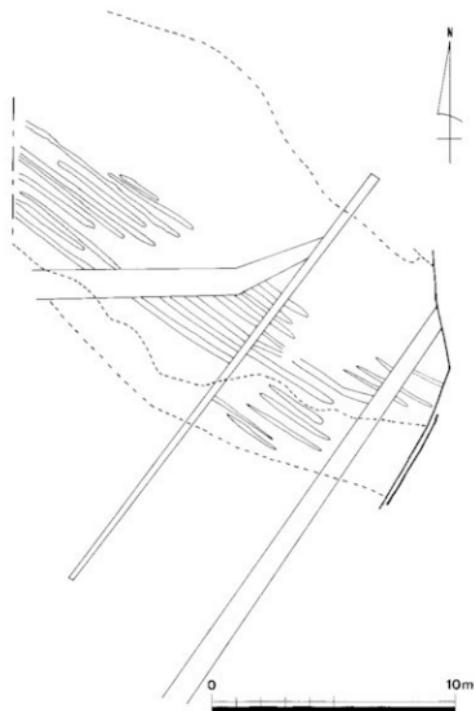


図5 素掘り溝平面図

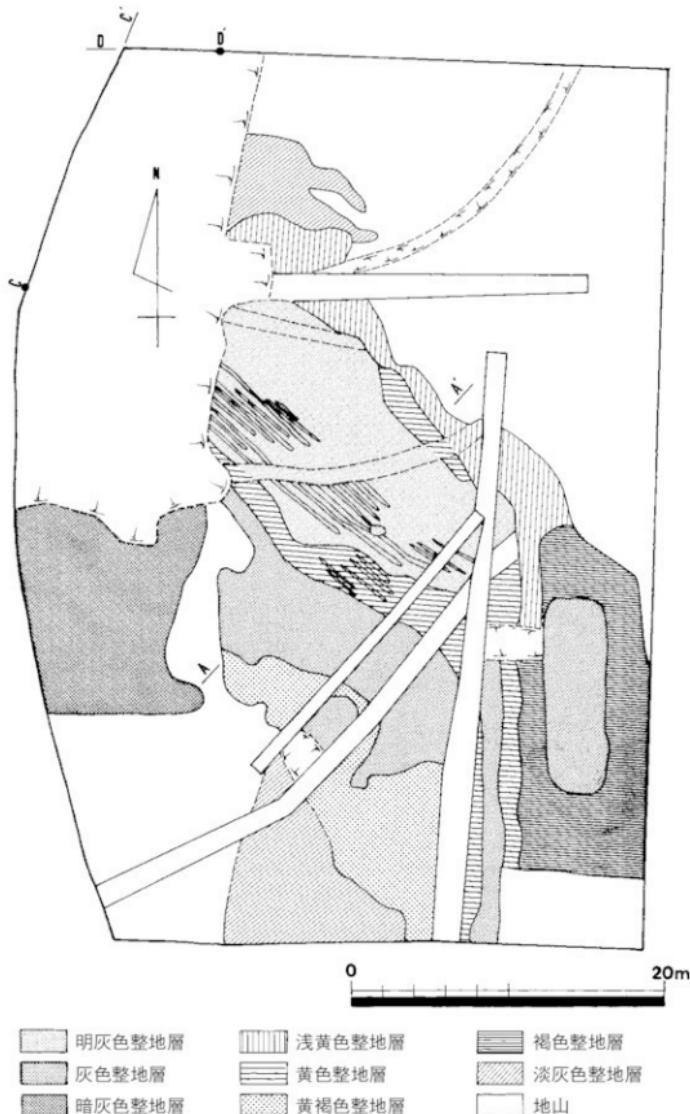


図6 上層遺構と近世整地層

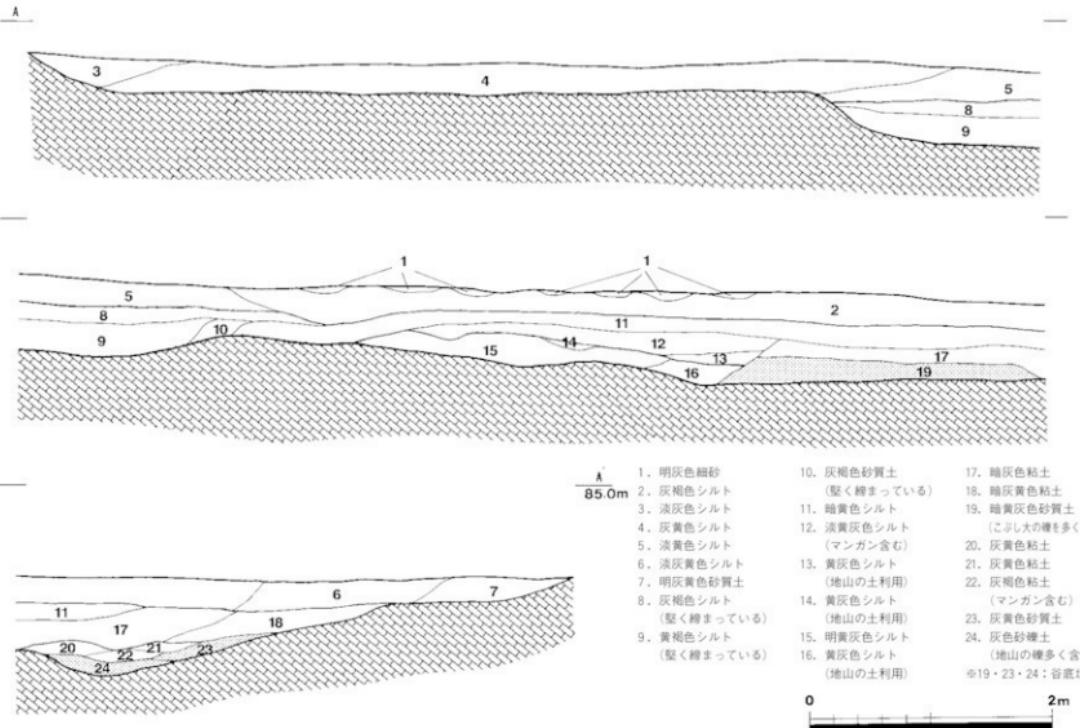


図7 土層断面図(1)

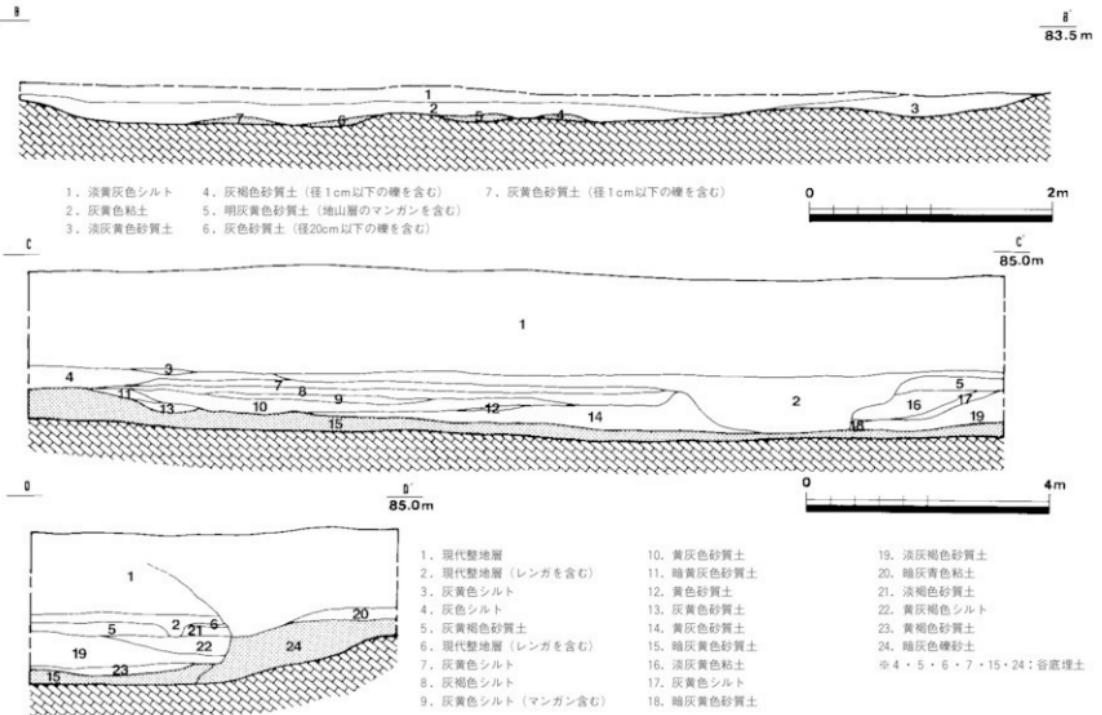


図8 土壌断面図（2）

第2節 下層遺構

近世整地層を完全に掘削すると、調査区全域において地山面があらわれた(図9)。地山面は南東から北西へ向けて下る緩斜面を成している。もっとも高所の調査区南東隅での標高は83.75m、もっとも低い箇所の調査区北西隅では標高82.00mを計測し、その比高差は1.75mである。この面において、調査区を南東から北西へ斜めに走る自然地形の谷筋が検出された。ただし、現存する地形は、谷の底部分に限定されるようであり、谷の斜面より上方は後世の開発工事によって削平されたものと考えられる。しかしながら、谷筋の右岸では谷底部分から約25cm程の高さまでは斜面裾部分の原地形を留めているようであり、また、谷筋の左岸では標高82.75m～83.25m付近に傾斜変換点があり、かつてはこの箇所が斜面裾末端をなしていたようである。谷底の幅は、上流側の調査区南東の部位では1.0m、下流側の調査区北西の部位では13.5mを測る。谷底は下流側の標高82.5m付近で傾斜角度を強めてさらに西北西方向へ下っており、狹山池東岸付近にある狹山池堤神社の祠方向へ下っていくものと想定される。谷底の一一番深い部分は、上流側で標高83.00m～83.50m、下流側で標高82.00m～82.75mを測る。上流側の谷底部分には、先述したように灰黄色砂質土・灰色砂礫土等の礫を多く含む谷底堆積層(土層番号19・23・24)が確認された。下流側の谷底部分でも同様で、図9のB-B'断面で作成した土層断面図(図8上段)に示したように、地山直上に厚さ6cm以下の灰黄色・灰褐色の砂質土からなる谷底堆積層が確認された。図9のC-C'断面およびD-D'断面では、図8中段・下段の図のように厚さ30cm～70cmの暗灰黄色砂質土・暗灰色礫砂土等、礫を多く含む客土が堆積していた。これらの谷底堆積層からはコンテナ約1箱分の須恵器片と土師器片が出土している(図11)。須恵器にはTK47型式の杯身のほか、TK209型式の杯蓋、TK217型式古段階の杯H身・杯G蓋等が含まれる。近接する狹山池4号窯(SI4)との関連性を問われるところであるが、この窯が生産した須恵器はTK217型式第2類に限定される。堆積土中に含まれる須恵器の型式幅はTK47型式からTK217型式にまで及ぶため、窯跡に関連する遺物も含まれている可能性があるが、それ以外の要素を考慮する必要がある。おそらく、かつて中位段丘上に存在した古墳時代の集落遺跡等から谷底へと滑落した遺物が多く含まれているであろうと想定される。よって、この消失した集落遺跡の存続時期は、5世紀後葉から7世紀前葉頃までの時期幅の中に求められる。また、谷底下流部のB-B'断面付近では、長径1.1m・短径0.8m・深さ約0.3mを測る焼土坑が検出された。その埋土は黒色の炭灰土であった。何らかの燃焼痕であろう。この焼土坑は、谷底堆積層の上面から寧たれた遺構である。谷底堆積層に包含する須恵器のもっとも新しい型式はTK217型式である。よって、焼土坑が使用された時期は7世紀前葉以後と考えられる。谷筋の左岸では土坑1が検出された。土坑1は平面で長径3.0m・短径1.2m・深さ約50cmを測る。この付近では近世の造成工事の際に切土が行われたと考えられ、土坑埋土内から18世紀頃の陶器中水注蓋が出土しているため、土坑1の使用時期は18世紀以後と推定される。



図 9 下層構造と谷地形

第4章 遺物

第1節 上層遺構出土遺物

近世整地層の直上および現代整地層内からは、陶磁器・土器の小片等の遺物が出土した。遺物の総量は非常に少なく、コンテナ1箱分にも満たない。図10の1と3は現代整地層内からの出土であるが、他はすべて近世整地層直上の出土である。個々の遺物の詳細については、表1の上層遺構等出土遺物観察表を参照されたい。

現代整地層から出土した1の肥前系の磁器小杯は、19世紀以後のものである。3の土師質培焰の時期については特定しがたい。

近世整地層直上から出土した4は肥前系の磁器小碗で、19世紀頃のものである。5は京系の陶器碗、7は丹波系の炻器瓶、10は产地不明の炻器蓋で、いずれも18世紀以後の江戸時代後期のものと考えられる。2の土師質火鉢、6の土師質培焰、8の土師質用途不明品(土人形の一部か、あるいは面子か)、9の鉄釘は、いずれも時期等不明である。

第2節 下層遺構出土遺物

下層遺構面の谷底堆積および土坑からは、コンテナ1箱分未満の遺物が出土した。図化可能なものは図11に掲載した9点のみである。個々の遺物の詳細については、表2の下層遺構出土遺物観察表を参照されたい。

土坑1から出土した11の瀬戸・美濃系陶器中水注蓋は、18世紀頃のものである。

谷底堆積土内から出土した須恵器のうち、下流側から出土したものは12・14・15・16・17・18で、上流側から出土したものは13・19である。なお、図化はできなかったが、図版3-1に写真を掲載した土師器片は、壺の頭部の一部と思われる。おそらく、古墳時代前期のものと考えられる。

12の杯身は、たちあがり高1.6cm・口径10.6cmを計測し、13の杯身はたちあがり高1.9cmを計測する。いずれもTK47型式に含まれるものである。14の杯蓋は口径13.9cmを計測し、小片ではあるが、TK209型式に含まれるものと考える。15の杯身はたちあがり高0.5cm・口径10.6cmを計測し、TK217型式第1類～第2類の法量と形態を示している。16の杯Gの蓋は、かえり高0.2cm・口径10.3cmを計測し、TK217型式第2類に含まれるものである。17は壺の口頭部、18は脚付長頸壺の肩部である。型式は特定しがたいが、TK209型式以後のものと考えられる。19は提瓶の体部で、TK43型式以後のものと考えられる。

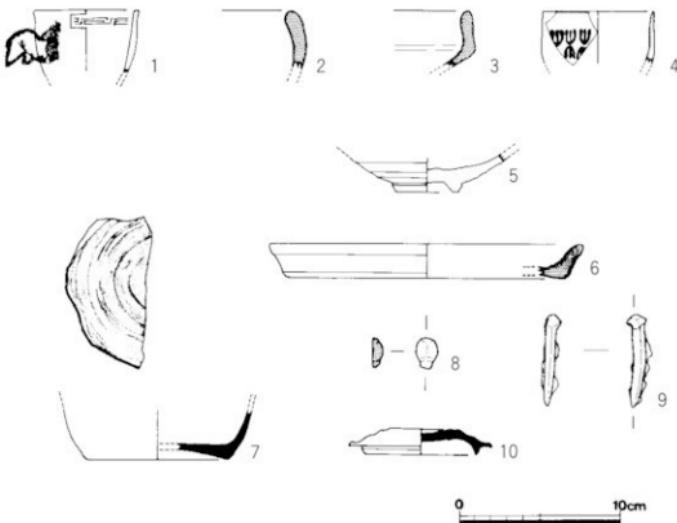


図10 上層遺構等出土遺物

表1 上層遺構等出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量 (cm)	産地	施釉・文様	備考
磁器 小杯	10-1 3-3	口径6.6 残存高4.0	肥前系。	透明釉。外面：青色染付動物。 口縁部内面：青色染付雷文。	反転復元。
土師質 火鉢	10-2 5-18	残存高3.7			色調：褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：口縁部の一部。
土師質 焙烙	10-3 5-15	残存高3.5	内面に2条の浅い沈線が めぐる。		色調：褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：わずか
磁器 小椀	10-4 3-2	口径6.6 残存高3.3	肥前系。	透明釉。染付。 口縁端部：鉄釉。	残存：口縁部の一部。
陶器 楪	10-5 3-6	底部径4.4 底径4.0 残存高2.1	京系。	白濁釉。 高台・見込み：露胎。	色調：暗黃褐色。
土師質 焙烙	10-6 5-16	口径9.6 残存高2.1			色調：暗褐色。
炻器 瓶	10-7 3-4	底径8.8 残存高3.2	丹波系。	内面：圓文。	胴部押印。反転復元。
土師質 不明	10-8 5-17	幅14 残存高1.8			色調：褐色。
鉄釘	10-9 5-20	全長5.7			
炻器 蓋	10-10 5-19	口径7.0 器高1.3	不明。	灰釉。	色調：内一暗灰褐色、外一暗灰色。反転復元。

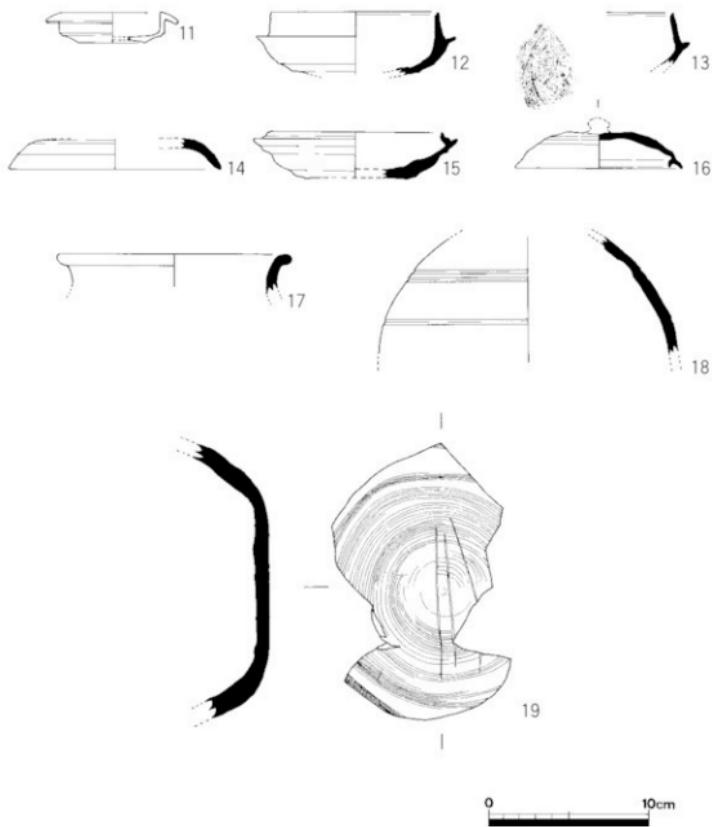


図11 下層遺構・谷底埋土出土遺物

表2 下層遺構出土遺物観察表

器種	図面版	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
陶器 中水注蓋	11-11 3-5	口径6.0 基部径8.2 残存高1.9		内面・口縁部：青磁釉。	色調：外一暗灰緑色、暗黄褐色。 漬戸・美濃系。
杯身	11-12 4-7	口径10.6 受部径12.4 残存高3.8 T高1.6 T角度 15° 15'	たちあがりは基部より上方にのびる。端部はやや丸く、内面に段を成す。受部は外上方にのび、端部はやや丸い。底体部は浅い。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯身	11-13 4-8	残存高3.2 T高1.9 T角度 18° 15'	たちあがりは基部より上方にのびる。端部はやや丸く、内面にややあまい段を成す。受部は外上方に短くのび、端部は丸い。底体部欠損。	回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：たちあがり・受部の一部。
杯蓋	11-14 5-11	口径13.9 器高3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや内擣して下方に下る。端部は丸くおさまる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：密。3mmの長石をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/10。反転復元。
杯身	11-15 4-10	口径10.6 受部径12.8 残存高2.8 T高0.5 T角度 48° 15'	たちあがりは内傾したのち、端部付近ではほぼ直立する。端部はやや丸い。受部は外方にのび端部は丸い。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ切り未調整。他は回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：内一灰青色、外一暗灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。1mm以下の石英をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2/5。反転復元。
杯G蓋	11-16 4-9	口径10.3 残存高2.2 かえり高0.2 かえり角度 38° 00'	体部・口縁部は外下方に下り、口縁端部で接続する。口縁端部はやや丸い。口縁部内面に内傾したのち直立するかえりを付し、端部はやや鋭い。天井部外面中央につまみを付すが、欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：青灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：3/4。反転復元。天井部外面にヘラ記号「×」あり。内面灰かぶり。
甕	11-17 5-12	口径14.4 残存高2.5	口頭部はやや外擣して外方にのび、口縁部は外上方にのびたのち外方にのびる。端部は丸くおさまる。頭部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調：内一暗灰色、外一灰色。 胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：口頭部の一部。反転復元。口縁部一部に自然釉付着。
脚付長頭壺	11-18 5-13	体部最大径 18.7 残存高7.1	肩部・体部は下外方に下る。肩部体部境界に2条の鈍い沈線をめぐらし、体部上方に1条の鈍い沈線をめぐらす。口頭部・体部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：肩部の3/5。反転復元。
提瓶	11-19 5-14	残存高17.2 5-14	口頭部欠損。体部・底部は正面で球形を成し、側面でやや角張った稍円形を成す。肩部および体部背面欠損。	体部前面、カキ目調整。肩部・体部側面、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	クロ回転：右方向。色調：灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存：1/6。ヘラ記号：体部前面に「川」あり。外側灰かぶり。

(Tはたちあがりを示す)

第5章　まとめ

今回の発掘調査では、18世紀後葉前後と推定される時期の造成工事に伴う整地層を確認した。また、その上面において畑の耕作痕を確認した。幕末以後に作成されたと推定される「狹山藩陣屋下屋敷図¹⁾」によると、今回の調査区は「芝地」・「御馬場」・「ハタ」と記されている箇所の一部に相当するものと思われる。この近世の造成工事は、中位段丘上にひろがっていた小高い丘地形を削平して平坦に整地したもののように、近世整地層を掘削すると、南東から北西へ斜めに走る自然地形の谷筋と、その両側には削平されて平坦となった地山面があらわれた。狹山池東岸の大正時代の地形をある程度読み取ることができる「狹山池法下耕地整理地区及びニ隣接スル土地現形并予定図」では、現在の狹山池堤神社の祠が建っている付近へのびる谷筋が記されている。今回の調査区はこの谷筋の上流部付近に位置するようである。

「狹山藩陣屋下屋敷図」において、この谷の出口がどこに相当するかを特定するのは難しいが、狹山池の岸ラインおよび道路等との相互の配置関係から推測すると、下屋敷御殿の西側に記されている「的場」南西で狹山池岸ラインが入り江状となった部位ではないかと推定される。「狹山藩陣屋下屋敷図」に記されている「堤明神」の位置を現在の狹山池堤神社の祠が建っている場所と同一であると考えがちであるが、図4の平面図と見比べるとそれは間違いであるよう思える。「狹山藩陣屋下屋敷図」の「堤明神」は「明神山」の北端に位置しており、旧さやま遊園の屋外プール北端に相当するのではないかと考えるものである。または、「狹山藩陣屋下屋敷図」では「的場」南西の入り江地形と「堤明神」の間にかなりの距離があるように描かれているが、この点に問題があるのかも知れない。つまり、狹山池堤神社祠は、現在の位置へ近代のある時に若干の移動が行われたか、もしくは、絵図中で「堤明神」を「御馬場」西側の鳥居から真っ直ぐ西の位置に描いたために生じた誤差かもしれない。

狹山藩陣屋跡下屋敷の範囲内において、上記のような位置関係であるとすると、今回検出した南東から北西へとのびる谷筋を18世紀後葉前後に切土と盛土で造成して平坦な地形へ改変し、馬場・芝地・畑として利用したものと推定されよう。今回の調査区から北西方向にある現在の狹山池堤神社祠付近では、「狹山池法下耕地整理地区及びニ隣接スル土地現形并予定図」を見る限り、造成工事による埋め立ては行われず、大正時代には低湿地となっていたと判断される。この地形の名残は、かつてはさやま遊園の園内において確認することができた。

今回の発掘調査で谷底堆積土から出土した遺物には、土師器片と須恵器がある。このうち、須恵器では5世紀後葉の杯身、7世紀初頭の杯蓋、7世紀前葉の杯身・杯蓋を確認した。前述したように、このうち7世紀前葉のものは近接する狹山池4号窯の生産品、7世紀初頭のものは狹山池東岸遺構の遺物および狹山池2号窯・3号窯の生産品が混入した可能性も捨てきれない。しかしながら、5世紀後葉の遺跡は近隣において既応の調査で確認されておらず、近世の造成工事で消失した「明神山」等の小高い丘の上に、5世紀後葉以後の集落が営まれていた可能性はきわめて高いと考える。また、詳細な時期は不明であるが、出土した土師器片は古墳時

代前期に遡る可能性があり、古墳時代前期から集落が成立していたことも想定される。

狹山池周辺においては既応の調査によって、6世紀後葉以後に須恵器生産が開始され、7世紀前葉に狹山池が築造されたと判明していたが²⁾。今回の調査によって、それ以前の人々の活動の痕跡が確認されたことは非常に重要である。将来、当該調査区よりも北方でのさやま遊園跡地における開発に伴う発掘調査においては、狹山藩陣屋跡下屋敷の遺構の確認・記録が主体となろうが、古墳時代後期以前の遺構・遺物についても充分な注意を払う必要があろう。

註記

1) 都築忠夫氏所蔵。下記書籍等に収録。

『大阪狹山市史叢書 絵図に描かれた狹山池』大阪狹山市教育委員会、1992年

2) 『狹山池』埋蔵文化財福、狹山池調査事務所、1998年

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせい14ねんどさやまはんじんやあとはくつちょうさほうこくしょⅠ							
書名	平成14年度狹山藩陣屋跡発掘調査報告書Ⅰ							
副書名								
シリーズ名	大阪狹山市文化財報告書							
シリーズ番号	26							
編著者名	植田隆司							
編集機関	大阪狹山市教育委員会							
所在地	〒589-0011 大阪府大阪狹山市狹山1丁目2384-1 TEL. 072-366-0011							
発行年月日	西暦 2002年11月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さやまはんじんやあと 狹山藩陣屋跡	おおさかみ おおさかさやまさやま 大阪府 大阪狹山市狹山	27231	—	34度 30分 00秒	135度 33分 21秒	20020402 / 20020531	2,166	宅地開発 工事に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
狹山藩陣屋跡	城館跡	古墳時代中期 ～飛鳥時代(5世紀後葉～7世紀前葉)、江戸時代(18世紀～19世紀)	焼土坑・包含層 造成工事跡・烟跡・土坑	土師器・須恵器 (杯身・杯蓋・杯G蓋・甕・脚付長頸壺・提瓶) 陶器(中水注蓋・椀)・磁器(小杯・小椀)・炻器(瓶・蓋)・熔炉・火鉢・鉄釘	近世造成工事以前の谷地形を検出。			

図 版



a. 調査区全景



b. 近世整地層



c. 素掘り溝





1



2



3



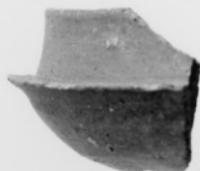
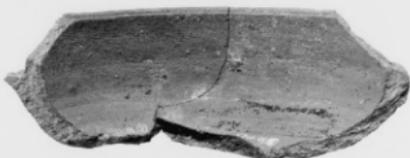
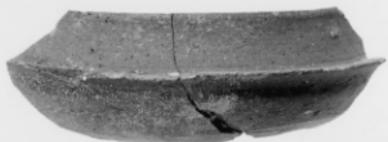
4



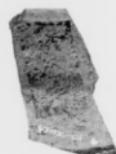
6



5



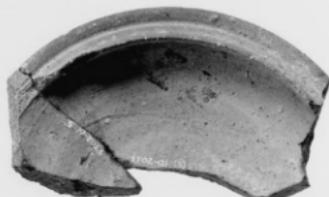
7



8



9



10



大阪狭山市文化財報告書26

平成14年度狭山藩陣屋跡発掘調査報告書Ⅰ

発 行 日 平成14年(2002年)11月29日

編集・発行 大阪狭山市教育委員会

大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384番地の1

印 刷 橋本印刷株式会社

奈良県北葛城郡當麻町竹内365番地1号